

# 英語の仮定法と古文の反実仮想による教科横断授業

土屋 進一

## はじめに

古文や英語を苦手とする生徒の多くは、句法や文法を覚えることに消極的な気持ちを持っていることが多いと思われる。今回実施した古文と英語による教科横断型授業では、言語学習が、単なる機械的な句法や文法の暗記ではなく、理論によって成り立っていることを理解させることを目的とした。ここでは、古文の「反実仮想」と英語の「仮定法」の共通点や相違点を、グループによる対話的な活動を通じて気づかせ、言語間の違いを超えた普遍的な感情理解まで落とし込んで生徒の理解を促すことを目指した。

## 1. 単元目標

- (1) 英語の「仮定法」と古文の「反実仮想」を比較し、共通点・相違点を知る。
- (2) 英語と日本語における「仮のものを想定する」際の思考の違いを捉える。

## 2. 指導生徒

高校1年生普通科 A 2組 26名(男子15名 女子11名)

## 3. 指導手順

導入では、英語、古文の各担当教師から、英語の仮定法と古文の反実仮想を同時に学習することの意義と効果について説明をした。また、本日学ぶテーマに関する問いかけ(「英語の仮定法と古文の反実仮想の共通点・相違点は何か」)を行い、生徒の授業に対するレディネスを促進した。

展開では、各教師から英語と古文の例文(英語: If I were a bird, I would fly. / 古文: 鳥ならましかば、飛ばまし)を提示し、黒板の左端を英語、右端を古文のスペースとして英語の仮定法と古文の反実仮想の概要を端的に説明した(図1)。

格子状の枠の中に上段に英語、中段に現代日本語、下段に古文を配置し、上段の英語の枠に各単語を記載したプリント(図2・資料1)に、英語と対応する日本語と古文を穴埋めさせる形で、英語・日本語・古文を横断させた。

その後、グループ内で分かったことや気づいたことをディスカッションさせた。

(英語) 例文	(生徒の発表スペース)	(古文) 例文
	<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	
	<input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/>	

図1(板書)

英語	If	I	were	a	bird,	I	would	fly.
日本語								
古文								

図2(ワークシートの一部)

さらに、グループ内で自分たちの意見を共有し、まなボード(B3サイズのホワイトボードでグループでの協働学習によく用いられる。黒板に貼ることができる。)にまとめさせた。この段階で、英語と古文の担当教師は、机間巡視しながら、生徒のつまずきを確認していった。すると、事前の予想とは異なり、多くの生徒が理解しづらいと感じていた部分を発見することができた。例えば、英語のIfと現代日本語・古文の比較において、助詞「ば」の接続につき、現代日本語の仮定形接続と、古文の未然形・已然形接続を混乱している生徒が多数いることが分かった。そこで、古文の担当教師と相談し、急きよ、生徒がつまずいていた箇所解説に切り替え、その問題点を補完した上で、その先の議論ができるようにした。このように教科横断型の授業は、生徒の授

業の理解度を深めるだけでなく、生徒の思わぬトラブルスポットの発見や解消の観点からも効果的であることが確認できた。

グループでの意見の共有を終えると、図1のようにまなボードを黒板に貼り付けさせ、グループ毎に発表してもらった。

**ワークシート (グループワーク)**

1年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番 氏名 \_\_\_\_\_

1. 次の例文から英語・古典・日本語を比較し、そこから何が分かるか考えてみよう。

「鳥ならましかば、飛ばまし」＝「If I were a bird, I would fly.」

英語	If	I	were	a	bird,	I	would	fly.
日本語								
古文								

★英語 → 『Vision Quest』 p.268-270 を参照  
 ★古文 → 『体系古典文法』 p.66 を参照  
 《気づいたこと・分かったこと・感じたこと》 グループ

《気づいたこと・分かったこと・感じたこと》 他の班

資料1

全グループの発表が終わると、英語、古文の担当教師が、全てのまなボードを見て、問題提起やコメント、補足を行い、生徒の理解を深化させた。その際、同じ意見と異なる意見をそれぞれ赤と青のマーカーペンでカテゴリー化しながら補足説明をした。生徒から出た主な意見は次の通りである。

(「まなボード」より)

- ・古文には主語がない(省略されている)。
- ・日本語の「ば」の位置と英語の If との関係性が難しかった。
- ・日本語には冠詞がないが、英語は、a bird のように冠詞がある。
- ・英語は時制を大切にしている。日本語、古文は、

動詞の活用を大切にしている。

このような生徒から出された意見を踏まえ、古文の教師が、日本語と英語の主語の有無により、英語で話す時は常に「誰が」を意識しなければならないこと、そして、日本語ならば、相手の意図を汲み関係性を重要視する文化が言葉の構造にも関係していることを、英語教師とインタラクションを行いながら解説した。それと同時に、日本語では主語(私・我など)が関係性によって変わることについて、具体例を交えながら説明した。一方、英語教師は、日本語には冠詞がないため、英語学習において冠詞の習得は難しいこと、特に日本語を英語に翻訳する際の難解さを松尾芭蕉の俳句(「古池や蛙飛びこむ水の音」)を挙げながら説明した。

授業の残り5分程度で、振り返りも行った(資料2)。生徒の感想から、英語学習や古文の学習に対する動機づけとなったと思われる主なコメントを以下に挙げておく。

**振り返りシート**

1年 \_\_\_\_\_ 組 \_\_\_\_\_ 番 氏名 \_\_\_\_\_

1. 今日の授業の中で「学んだこと」・「気づいたこと」・「深まったこと」を書いて下さい。



2. 今日の授業で疑問点や質問、もっと知りたいと思うことがあったら書いて下さい。



資料2

(「振り返りシート」より)

1. 今日の授業の中で「学んだこと」・「気づいたこと」・「深まったこと」を書いて下さい。

- ・現代語と古文の「ば」は同じような使い方の良いのか。もし~なら「ば」/ましか「ば」
- ・日本語には冠詞がないことを「数を特定していない」と考えていたが、そもそも冠詞の概念がないことに驚いた。
- ・主語(私、我など)は、関係性によって変わる。
- ・日本語・古文と英語は別物と考えていたが、英語を覚えるにあたって日本語・古文から入れば分かりやすいと思った。
- ・違う言語を比べると新たな発見があったことが面白かった。
- ・英語は主語がとても大切で日本語はその周りの「コト」も表すという話はとても興味深かった。
- ・英語・日本語・古文で対応させて考えてみると語順や主語の省略などに気づくことができた。
- ・日本語と英語の文法(語順)が違うのは、外国人と日本人の世界観の相違から来るという話が面白いと思った。
- ・3つの言葉は全て活用があるが、英語は時制が変化し、古文・日本語は言葉の接続が変化した。
- ・英語は時制を大切にしており、日本語、古文は関係性や表現、感性を大切にしていた。
- ・日本語での主語は物質的ではなく「关系的」であるということは初めて知ることができたので、比較することは大切なことだと思った。

2. 今日の授業で疑問点や質問、もっと知りたいと思うことがあったら書いて下さい。

- ・仮定法以外も比べると面白そうだった。
- ・日本語と英語の共通点についてももっと知りたいと思った。
- ・仮定法だけでなく、その他の文法においても関係づけることができるのか知りたい。
- ・古文と英語のつながりを知りたい。
- ・仮定法過去完了の場合での古文との比較も知りたいと思った。
- ・漢文と英語もコラボしてみたい。
- ・漢文と英語が似ているのは何か理由があるのか。もっと様々な視点から言語を比較してみたい。

・学びが深まったので、次回は古典の授業に英語が入る立場でもう1回やってほしい。

以上のような生徒のコメントから判断すると、教員側が考えていた授業実施の意図や目的は、ある程度、生徒に伝わっていたようである。

このように、古文文法と英文法の文法構造の学習に、2つのチャンネルを与えることで、学習者の気づき(noticing)を促進する効果があったといえよう。さらに、生徒と教師双方の潜在的な能力を引き出せる可能性を、この授業によって改めて感じることができた。

#### 4. おわりに

今回、英語×古文の教科横断型授業を行ったが、英語・古文・現代日本語の三領域を横断することにより、生徒が別々に学んでいた科目を意味のある横のつながりとして体感している姿が印象に残った。言葉の持つ文化や背景を深めるためには、それぞれの言葉同士の比較や教師と生徒間のインタラクション、そして、教師同士や生徒同士の学び合いも不可欠であろう。

今回の授業の生徒のフィードバックを踏まえて、比較することで様々な視点を持ち、2つのことを同時に学ぶことによって学習することの意義を体感できるような授業作りをさらに模索していきたい。具体的には、英語のSVOC構造の語順の理解を応用し、漢文の授業における英語教師との協働授業も今後、実践してみたいと思う。

(西武学園文理中学高等学校 教諭)

#### 謝 辞

本授業を行うにあたり、本校国語科の瀬戸富美子先生には、授業当日の指導のみならず、指導案作成から授業実施に至るまでの打合せにおいても多大なご協力をいただきました。

ここに心より感謝申し上げます。